日系ブラジル人児童・生徒の言語生活と多文化主義

ー学習権の保障という観点からー[1]

野　山　　広
（東京学芸大学）

1．はじめに

1989年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」は、1994年３月、日本の国会においても全会一致で批准（締結）され、同年５月に公布された。締結国である日本には、この条約において認められている権利の実施のためのあらゆる適当な立法上、行政上およびその他の処置（教育制度の改革や政策立論等）をとる義務が生じたわけである。しかしながら、あれから約２年たった現在、日本の教育政策や制度がこの義務を果たしえる包容力を保持しているかは大いに疑問である[2]。なぜなら、日本の教育は、未だ日本人としての子どもの権利が視野に入っているだけの一元的施策の展開にとどまっており、制度上、多様な背景を持った子ども達に対する「学習権」の保障が十分にはなされていないものとなっているからだ。換言すれば、ほとんどの場合、日本人として「適応するための教育」がなされ、他民族・他国籍・無国籍の子どもが自らの言語や文化的価値観を維持・発展させることを視野に入れた「創造・変革するための多文化主義的な教育」はなされていない状況にある。

例えば、「子どもの権利条約」の二十九条では「教育の目的」が規定されているが、その目的の一つとして、「子ども自身の持つ文化的アイデンティティ・言語・価値」の尊重があげられている[3]。異文化の子どもの人権の一つである学習権の保障を考える場合、言語や文化的アイデンティティ（安定根）の尊重は不可欠なものである。にもかかわらず、現状の制度では、人類の生存にとって不可欠な道具であるリテラシーの力が十分に習得できない可能性が出てくる。なぜなら、今のままでは、最悪の場合、子ども（外国人児童・生徒）たち[4]は、母語（第一言語）の教育の機会を奪われた場合、「自分自身の世界を読み取り、想像し、分析し、質問し、記述することを通して、新たな歴史を創造し、個人および集団の力量を発達させる権利」（学習権）を剥奪されたも同然の状況に追い込まれる可能性が大きいからである[5]。

こうした最悪の状況を避け、全ての子どもたちに対する「子どもの権利条約」や「学習権」の保障を堅持するためには、学校だけでなく、①国（政府）、②子どもたち自身や親（家族）、③その他子育てにかかわる当事者全て（地域の人々

や企業、地域行政等）のあらゆるタイプとレベルでの人々の協力が必要になってくる。そして、堅持活動の手始めとして、言語や文化的アイデンティティ（安定根）の尊重を規定した二十九条の内容を教育活動の指針としながら、様々な制度上の改革を行っていくことが期待される。

具体的には、あらゆる地域に居住している人々の年齢（時間）や出身（国・民族）、更には、生活する場（地域社会、学校、職場）を包み込んだ、多文化主義的で生涯教育的な視点からのコンセンサス作りや理念の構築（意識の統合と連帯・協調）が不可欠となる[6]。そして、並行して、国家の教育政策・行政を方向づけ、意識の統合・連帯をスムーズに行い、権利を実現するための制度（立法レベル、司法レベル、行政レベル、自治体レベル）の多元的な改善が望まれるところである[7]。

それでは、実際、日本の地域社会において異文化の狭間に生きている外国人子弟（児童・生徒）の言語生活[8]および彼ら子弟に対する教育の実態はいかがなものであろうか。最近（1990年６月）の入管法の改正等による状況変化の中、地域社会に視点を定めると、中南米からの日系人家族（２世・３世）の増加の持つ意味は重要だと思われる[9]。

こうした人々との共存・共生・共活に必要な諸改革の基礎資料作成へ向けて、何らかの貢献ができないものかと思い、本調査（２年計画の１年目が終了）は行われた。本稿では、この日系ブラジル人児童・生徒の言語生活に焦点を当て、子弟の日本語能力、家庭内・外での言語の使い分け、将来についての考え、言語意識、学歴、職業、学校での生活、文化や母語に対する意識の問題等に関して特に言及したい。換言すれば、母語・母文化保持教育の問題も視野に入れた多文化主義的な視点（学習権の保障という観点）から、彼ら子弟の言語生活の現状を分析したい。なお、子弟の言語生活に関連して本調査で行われた保護者（父母）や担当教員に対する意識調査結果に関する言及は別の機会に行うこととしたい。

具体的には、「入管法」改正以降特に日系ブラジル人労働者が増加し、その子弟の就学問題が急増している群馬県太田市[10]において、彼ら日系ブラジル人児童・生徒（小学生77名・中学生25名、養護学校１名、1995、９）が通学している小・中学校の内、実際に日本語担当教員がいる小学校７校、中学校５校の計１２校（Ｓ小、Ｎ小、Ｏ小、Ｋ小、Ｈ小、Ｃ小、Ａ小、Ｋ中、Ｈ中、Ｍ中、Ｈ中、Ａ中）を対象に実態調査（アンケートやインタビュー等）を行うことで、これらの問題に接近を試みた（具体的な調査方法や調査内容・結果に関しては、次章 2-3 および巻末の付表１～２、付録などを参照）。

2．調査対象校と回答者の属性および調査方法

2-1. 調査対象校の属性

太田市は群馬県の東部に位置し、東京から85km、東武鉄道急行電車で浅草から約１時間の距離にある（以下、文化庁の配布資料：平成７年度『地域日本語教育セミナー』pp.8-17 を参照）。

外国人児童・生徒のための日本語教室については、次のような展開を見せている。太田市の教育委員会では、外国人子女教育に対応するため、平成３(1991)年度から日本語指導教室を開設し、日本の児童・生徒と同じ受け入れ体制で就学させ、外国人子女１人１人の日本語習得状況や言語能力の実態に応じて、日本語力や生活適応能力の向上に努めている。平成７年度は日本語指導教室を開設（平成６年度９校、７年度12校）し、日本語指導助手を増員して（平成６年度７名、７年度９名：ポルトガル語６名・中国語２名・スペイン語１名）、外国人子女教育の充実を図っている。今回の調査対象校は日本語指導教室を開設しているこの12校である。

1995年５月１日の時点で、全人口約14万４千人の内、約 4,500人が外国人であり、そのおよそ半数が日系ブラジル人となっている。市内の全児童・生徒（14,597人）の内、日本語教育を必要とする外国人児童・生徒数は137 人で、その約26％を占める36人の日系ブラジル人子弟が25校（市内全体で29校）の小・中学校で日本語を学習していた。

1995年９月の時点（太田市資料参照）では、太田市に合計150 人（５月から13人増化）の外国人子女が就学しており、その内約７割の103 人（小学生77名・中学生25名、養護学校１名、1995、9 ）をブラジル人子弟が占めていた。今回の調査対象校はこの103 人の内、約80％を占める83名が就学する小学校７校（Ｓ小：10名、Ｎ小：９名、Ｏ小：10名、Ｋ小：５名、Ｈ小：７名、Ｃ小：15名、Ａ小：10名）中学校５校（Ｋ中：３名、Ｈ中：３名、Ｍ中：５名、Ｈ中：２名、Ａ中：４名）の計12校である。なお、市内の中央部に位置し、最も多くの日系ブラジル人子弟が就学しているＣ小も含まれている。

2-2. 調査回答者の属性

①日系ブラジル人児童・生徒（付表１－１および付表２の表4,5,6 参照）

日本語教育を既に必要としなくなった（日本語教室に通わなくなった）子弟も含めた日系ブラジル人児童・生徒に回答してもらった。回答者数は72名（アンケートの配布数は81、小学校での配布数61、未回答者９名、中学校での配布数20、未回答者０名）で、その内訳は、小学生52名（男子26人，女子26人），中学生20名（男子9 人，女子11人）で、子弟の母語、年齢と在籍学年、来日時の年齢、滞

日年数は、付表（１－１の表１～４）の通りである。なお、子弟の平均滞日年数（１年未満は0.5 年として計算）は約２年である。

②日系ブラジル人父母（付表２－１の表11参照）

回答者数は53名で、その内訳は、小学校児童の両親から36名、中学校生徒の両親から17名であった（表11参照）。

③日本語担当教員（付表２参照）

回答者数は12校の日本語担当教員（12名）の内、11名である。

具体的には、太田市の外国人子女教育指導教室指導教員会議に出席している計１２名の教員にアンケートをお願いして、１１名の回答を得た（アンケートの質問内容に関しては、付録２参照）。

2-3. 調査方法

郵送法によるアンケートとフォローアップインタビューによるものである。

具体的には、1995年の５月から調査活動を始め、太田市の地理や歴史的背景を理解した上でアンケートの準備にとりかかった。市立Ｋ中やＡ中およびＣ小での見学（参与観察）、Ｃ小の秋季大運動会の見学を経た上で、９月から10月上旬にかけて、帰国直前の日系ブラジル人児童にプレ（インタビュー）調査を行い、質問文や質問内容の調整を行った。その後、質問票のポルトガル語版も準備した上で、外国人子女教育指導教室指導教員会議（外国人児童・生徒に対する日本語教育を実際に担当している教員12名の集まり）に出席させて頂き、あらかじめアンケートの内容に関する説明会を開いた。そして、10月末から11月上旬にかけて、各学校の担当教員の方々の協力を得ながらアンケート調査（郵送法）を行った。協力に関しては、特に小学生（児童）からアンケートに答えてもらう際には、担当の日本語教員かバイリンガル教員からできる限り説明をしてもらいながら答えてもらうこととした（アンケートの質問内容：日本語・ポルトガル語版に関しては付録１参照）。

3．日系ブラジル人児童・生徒の日本語能力とその言語生活

3-1. 日本語能力

①学校教育における言語状況（付表２、表4-1、5-1、6-1 参照）

学校教育における児童・生徒の日本語能力に関する評価を各学校の日本語教育担当教員からしてもらったものである。表１～６においては、学校教育における言語状況（外国人子弟の言語能力におけるアカデミックな力＝学業を左右する能力：「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」）および「日常会話における日本語の理解状況」に関して、各学校ごとの日本語担当教員の協力を得て評価してもらったものである（質問内容に関しては、付録３参照）。

この調査の結果（表１～６）からは、大宮市の調査結果（野山、1992: 127 ）と同様、「『聞く力』や『話す力』は『読む力』や『書く力』に比べて習得しやすいということがわかる。なお、この調査で全項目「おおむねできる」と評価された子弟は22名（小学生19名、中学生３名）いたが、彼らの平均滞日年数は４年であった。

②日常会話における日本語の理解状況（付表２、表4-2、5-2、6-2 参照）

この調査で「おおむねできる」と評価された子弟は50名（小学生35名、中学生15名）いたが、彼らの平均滞日年数はおよそ３年である。

ちなみに、箕浦[11]の研究によると、13歳以前に渡米した海外日本人子弟の場合、日常会話がわかり始めるのに１年、授業がだいたいわかるようになるのに２年半かかり、第二言語のハンディを感じさせない程度のバイリンガルになるのにおよそ３年はかかるということである。また読む力に関しては、これも海外日本人子弟の場合であるが、中島[12]によれば、英語の読解力が在籍学年の平均値に到達するのに小学校低学年では５年から６年、高学年では４年から５年かかるという。従って、こどもの能力を来日２、３年後の日本語能力だけから判断・評価しようとするのは時期尚早であり、問題であることは明らかなようである。

こうした研究および上記の調査結果からもわかるように、バランスのとれたバイリンガルになるためには、学年あるいは年齢相応の基礎的学習言語能力＝CALP（Cognitive/Academic Language Proficiency)の保持・育成が子弟たちには不可欠である。一方教員には、言語教育に対する興味や学習動機を常に維持しうる授業を展開することが要求されてくる(Noyama: 1995b) 。そのためには、子弟、教員、家族、住民相互の協力と、長い期間（２年～７年間）の継続的努力が不可欠であろう。具体的には、子弟のセルフラーニング力（学習の動機付けを自分自身で明確化し自己管理できる力）[13]を育み、学習方略（Strategy）やバイリンガリズムに関する理解等[14]を深めてゆくことが肝要となってくるであろう。

3-2. 家庭内・外での言語生活

来日後の児童・生徒の言語（日本語・母語）能力の伸びや維持は、家庭内・外での言語使用状況や言語・文化に対する子弟本人あるいはその父母の意識や姿勢で左右されるものと思われる。

①話し相手によることばの使い分け

◇家族内でのことばの使い分け（付表１－１の表５参照）

まず、表５は、父母、兄姉、弟妹に対しては、母語で話すか日本語で話すかを尋ねた結果である。小学生の場合、母とはポルトガル語（以下ポ語）で話すという子弟が圧倒的である。父、兄姉とは約50％、弟妹とは40％の子弟がポ語で話している。また、両方で話す子弟は兄姉、弟妹とも約30％である。一方中学生の場合は約半分の生徒が父母に対してはポ語で、兄姉、弟妹に対してはその数が、ポ語、日本語、両方を使う場合のそれぞれが約３分の１ずつの割合となっている。また父に対して９名（小学生４名、中学生５名）、母に対して７名（小学生４名、中学生３名）ではあるが、両親と日本語で話す子弟がいる。父に対して日本語で話す中学校生徒の平均滞日年数は４年以上であり、５人中３人は、その父親の第一言語が日本語である。母に対して日本語で話す生徒の平均滞日年数は４年半以上である。一方、父に対して日本語で話す小学校児童の平均滞日年数は６年以上でありその４人の内３人は日本にそのままいたいと思っている。また母に対して日本語で話す児童の平均滞日年数は５年以上であり、その４人中２人は日本にいたいと思っている。彼らの中で両親とも第一言語が日本語という児童が一人いるが残りの児童の両親は全員ポ語が第一言語である。こどもの言語生活にあわせて親も日本語を話しているようだ。

◇家族外でのことばの使い分け（付表１－１の表６参照）

表６は「相手が大人や目上のとき」「相手の年齢が同じか下のとき」ポ語で話すか、日本語で話すかを尋ねた結果である。この場合、今回の調査では話す相手がポ語話者（ブラジル人で家族以外の人）という場合に限定をして聞いたのだが、家族の場合と比べて日本語あるいは両方を使うという子弟が増えている（家族の場合は約半分でしかなかったが、家族以外の人に対しては約４分の３：相手が大人や目上の時＝49／72、相手の年齢が同じか下の時＝57／72を占めている）。このことから、彼ら日系ブラジル人子弟達は、会話のレベルにおいては「家族以外の人には主に日本語で、家族には主にポ語で話す」という、いわゆるバイリンガル児として日常生活を送っていることが観察できる。

◇遊んでいる時のことばの使い分け（付表１－１の表７参照）

表７は「母語話者だけで遊んでいる場合」あるいは「日本人も一緒に遊んでいる場合」に母語で話すか日本語で話すか尋ねたものである。

母語話者だけで遊んでいる場合

母語話者だけで遊んでいる時に母語を話す子弟（29名：小学生23人、中学生６人）と比べて日本語を話す子弟は断然少ない（全体の８分の１の９名：小学生７人、中学生２人である）。大宮市での調査結果（野山、1992: 126-7)では、母語話者と話す時でさえも、日本語を使って話す子弟の方が母語を使って話す子弟よりも多かった（日本語：母語＝７：４）が、太田市の場合は日系ブラジル人が俄然多いということも影響してか、母語（29名）あるいは両方を使っている子弟（32人：小学生20名、中学生12名）で約９割（61／72）を占めている。両方使うという子弟が多いということは、ポ語を話すブラジル出身のこどもが多いということを示している。また、他の都市や地域の外国人児童・生徒のように「日本語に囲まれて徐々に母語話者同士でも母語を使わなくなりやがて忘れていく」というような可能性がそれ程高くないことも示している。換言すれば、太田市はその特殊さ故に、日本語・ポルトガル語を使うバイリンガル子弟が育まれる可能性を秘めた都市（地域）とも言えよう。

日本人も一緒に遊んでいる場合

一方、日本人も一緒に遊ぶ時にでも、ポ語を話す子弟が３名だけ（小学生のみ）いる。この子弟の滞日平均は１年未満（約半年）で父母の第一言語は全員ポ語である。３人とも日本語や勉強を教えてくれる日本人の友人がおらず、着た直後という状況も手伝ってか、ほとんどの状況でポ語しか使っていないようだ。３人ともバイリンガルになりたいという意志は持っており、今後彼らのネットワーク作りが広がっていくことを祈りたい。

更に、日本人も一緒に遊ぶ時に両方の言語を使うという子弟が半分近く（34／72：小学生＝27名、中学生＝７名）を占めており、この数の比率は来日間近の子弟が多い点（25名：小学生＝21名、中学生＝４名）を考えれば当然かもしれないが、大宮市の調査の結果（英語を母語とする子弟１名のみで他の母語を持つ子弟は全員日本語を使用）と比べればはるかに多い。この結果から、彼ら日系ブラジル人子弟を受け入れる（ホスト）側にいる日本人（太田市住民：子弟、教員、家族、地域住民）の寛容性や受容力の高さが伺える。以上、太田市における日系ブラジル人子弟のことばの使い分けの結果から次の２点がいえる。

＊日本語とポ語の混じった言語環境である学校生活と、主として母語を使う家庭での生活との間を交互に移動しながら、相手に応じて言語の使い分けを行い、いわゆるバイリンガル児として日常生活を送っていることがわかる。

＊父母との会話の場合を除いて、滞日期間が増えるほど母語を使う頻度は少なくなっている。ただ、他の地域（例えば、大宮市）と比べてその頻度はるかに多い。換言すれば、彼ら太田市に居住する日系ブラジル人子弟は、他の地域と比

べてバイリンガリズムが育まれる可能性を大いに秘めた環境で言語生活を送っていると考えられる。ただし、小学校の２年や３年生で来日した場合は、１年生から入学した方が子弟と比べて、更なる努力が必要となるようである。

②状況による使い分け（付表１－１の表８参照）

子弟たち自身の日常生活における自己表出場面においては、日本語と母語とではどちらが多く使用されるのであろうか。表８は、様々な状況を設定して尋ねた結果である。「夢・数・叫び・けんか・食事」は、「夢の中で」「数を数える時や計算をする時」「急な叫び声を上げる時」「けんかをする時」「家族と食事をする時」の各場面をしめしている。食事に関しては、他の状況（夢＝29／72、数＝16／72、叫び＝23／72、けんか＝17／72）と比べて、かなりポ語を使う子弟が多い（約６割＝42／72）。夢をみる場面でもポ語を使う子弟が多い（約４割＝29／72）。一方、数を数える時には他と比べて日本語を使う子弟が多く（半分：36／72を占める）、使い出す（変化する）のも他と比べて早いようだ。なお、この状況の場合、１年で変化した子弟が４人いる。アンケートから導き出されたデータ（主として中学校生徒からの情報：変化にかかった年数）からみて、食事場面を除く全ての状況による使い分けが「ポ語から日本語に変わる」のに１～４年はかかるようだ。以上の日系ブラジル人子弟の状況によることばの使い分けの結果から次の２点がいえる。

＊食事に関しては、他の状況（夢、数、叫び、けんか）と比べてポ語を使う子弟がかなり多く全体の約６割を占めている。

＊「日本語」か「両方」を話すという子弟が多く「母語」だけを使用しているものは極めて少なかった大宮市の場合（夢：３、数：１、叫びとけんかは０）と比べると、全体として母語（第一言語）であるポ語（夢：29、数：16、叫び：23、けんか：17）が使われる比率は高い。夢が日本語に変わるのには　最も時間がかかるようである。

3-3. 将来についての考え（付表１－１：表９の１参照）

「将来住む場所」は「わからない」と答えた子弟（12/72)を除くと、全体の約３分の１（21/60)の子弟が日本に残りたいと回答。参考までに、約３分の１の両親(18/53：日本＝10、他の国＝２、どちらでも＝６）が「子弟がブラジルに帰る必然性」を感じていない。具体的には、中学校生徒の場合、ブラジル７に対して日本８と、日本に残りたい子弟が多い。その理由は中学生の場合、「日本語を覚えるうちにポルトガル語を忘れているから」「金にあまりこまらないから」「自分の将来にあった国だと思うから」といった言語的、経済的理由が大きい。一方小学生の場合は「ポルトガル語がよくわからない」「ともだちがいっぱいいるか

ら」「ゲームができるから」「日本が楽しい」というように、言語的理由もあるが、中学生と比べて友人や遊びに左右された理由が多い。

3-4. 言語意識（付表１－１：表９の２参照）

「バイリンガル（二言語併用者）」になりたいかどうかという言語意識に関する質問である。バイリンガルになりたいという子弟（小学生＝41名、中学生＝15名で計56名：全体の９分の７を占める）が圧倒的である。興味深いのは、中学生の中で日本語よりもポ語の能力の方を伸ばしたいと答えた子弟は皆無であったわけだが、小学生の中には４人いることである。中学生の中にも来日直後の学生が４人いるわけだが、彼らも含めてもポ語の方を伸ばしたいという子弟はいないのである。この理由として二つ考えられる。一つは、中学で来日したあるいは５年生くらいから来日した子弟の場合、ポ語の基本は既に習得している、つまりいわゆるＣＡＬＰの基盤は築かれているが故に、日本語の習得に集中できる。第２の理由は小学校の低学年（３年生あるいは４年生以下）で来日した子弟（中学生の中に４年以上の滞在期間の子弟が６人いる）の場合、ポ語の自分の能力にあまり自信がないから何とかポ語も伸ばしたい、そうでなければ日本にいとどまる、あるいは日本語を第一言語として考えざるをえなくなったからである。実際、「日本語ができればポ語は忘れてもしょうがない」という生徒が４人存在する。彼ら４人の平均滞日期間は３年以上である。その中の２人は兄弟（兄は９才で、弟は８才で来日）であり、父母の第一言語はポ語であるが日本語の方も堪能であるようだ。両親はバイリンガルになって他の国で活躍して欲しいと希望しているようだが、彼らは滞日５年以上の経験やネットワーク（日本人の友人も多い）から、日本にいとどまりたいと希望している。家族、家族外かかわらず言語の使い分けや状況による使い分けもすべて日本語になっている。それ故か、ポ語の維持教室にも興味がないようだ。これは想像だが、彼ら２人のポ語能力は年齢相応に伸び切っていないと考えられ、それ故、ブラジルに帰りたくないのであろう。ただ、心配なのは日本語の学習能力評価に関しても、「聞く」以外の三能力（「話す」「読む」「書く」）に関しては３段階評価で２になっている点である。両方ともの言語が中途半端にならないように願いたい。実際のところ、彼らも含めた日系ブラジル人子弟の大半は正直なところ「日本語も勉強したいし、ブラジル人だからポルトガル語もやりたい」と思っているのではなかろうか。両親の日本語力が高くない場合やほとんどない両親と暮らす子弟の場合には「おうちの人が日本語がわからない、教えたい」というようなけなげな（深刻な or 頼もしい）理由もみかけられる。日系２世ならまだしも、３世の場合、その日本語力はほとんど期待できない場合が多いといわれる（太田市でのヒヤリング調査から）。こうした

３世の両親と共に来日した子弟の家族の場合、彼ら児童・生徒がバイリンガルになれない時には（イコール）、親子間のコミュニケーションの断絶を意味しており、そうならないように子弟も必死なのである。

3-5. 学歴（付表１－１：表９の３参照）

将来の「学歴」に関する希望に関して聞いたのがこの質問である。予想通り、「わからない」という小学生児童は多い（17名）。

「中学卒業で十分である」と答えた子弟の数は筆者の予想（５名くらい）よりも多かった（小学生＝７名、中学生＝２名、計９名）。更に、小学生52名の内９名（約20％）が大学院を希望しているという結果も筆者の予想（３～５名）をはるかに上まわった。中学生が３名希望しているのは予想がつく数字であったが、小学生の希望者数に関しては、親の高学歴願望（小学生の両親でアンケートに答えてくれた父母36名中、３分の１の12名が大学院までいかせたいと考えている）が反映しているものと思われる。「高校卒業で十分」と答えた子弟の数に関しては、ほぼ筆者の予想通り（10名前後）であったが、「大学までいきたい」と答えた子弟の数は全体で22名（約３割）であり、これも予想（２割くらい）より多かった。

＊この結果から、日系ブラジル人の子弟は中学卒業で十分と思っている子弟も何人かいるが、全体として高学歴を希望している者が多いことがわかる。

3-6. 職業（付表１－１：表９の４参照）

筆者自身、小・中学校時代どころか高校になってもなかなか職業に関するビジョンは明確ではなかったが、予想通り、小学生、中学生ともにまだ明確なビジョンは抱いていないようである。72名中約半分が答えてくれていたが、その内容から判断して、日本人児童・生徒の場合と同様、中学生の希望する職業（建築家、医者、エンジニア、コンピューター関係の仕事等）の方が小学生のそれ（トラックの運転手、野球の選手、工場で働く）と比べて現実的だと言えよう。全体的にスポーツ選手になりたい（主にサッカー選手）子弟が多い。

3-7. 現在の生活に関して（付表１－１：表10の１～４参照）

結果に関しては表－２、３、４の表10を参照。

◇ポルトガル語の維持教室に関して

ポ語に興味がある子弟の数が全体（72名）の半分（36名）、「教室があったらいい」という子弟の数は全体の約５分の３（43名）を占めている。バイリンガルになりたいという子弟の数56名からすれば、少ないような気もするが、現地での

ヒヤリング調査によれば、ポルトガル語（による学習）の通信教育（ブラジルで開発され私企業が委託されて行っているもの）を受けている子弟も既に何人かいるらしく、ポルトガル語の維持教育にかなり興味を持っていることがわかる。また、隣町の大泉町や太田市にあるポ語維持のための塾にも通った経験がある子弟が全体の約19％（13名：小学生＝９名、中学生＝４名）を占めており、その内７名（小学生＝６名、中学生＝１名）はいまだに通っているようだ。この通ったことがある子弟13名の内、自分から進んで通った子弟は５名（小学生＝４名、中学生＝１名）おり、バイリンガリズムに関する意識の高さが伺える。

＊ポ語の維持教室への関心はとても高い（たくさんのニーズがある）。

◇文化に対する考え方

日本とブラジルの両文化に対する意識に関する質問である。

全体の８分の５を占める45名（小学生＝27名、中学生＝18名）が「日本の文化も大切だが、ブラジルの風習や習慣も同じように大切にしてゆきたい」という考え方に賛成している。中学生はこの考え方に全体の９割が賛同していることになる。中学生の残り２人は「わからない」と無回答であった。

◇日本に来てから日本語以外のことで困っていること

日本とブラジルの気候の違い（冬の厳しい寒さと夏の蒸し暑さ）が大変だと思っている子弟が多い。社会文化的なもの、つまり習慣や風習の違いよるコミュニケーションの取り方の差異にとまどっている子弟も少なくない。日本語の勉強の上に英語の勉強をしなくてはいけないことが大変だという生徒もいる。

◇友人とのつきあいに関して

これは日系ブラジル人児童・生徒の言語生活におけるネットワークに関して尋ねたものである。

最初にことわっておくが、4-4．他の友達（学校の友達以外に友達はいますか？）の質問に関しては、回答数が計72ではなく30と少なくなっている。これはアンケートの内容をポルトガル語に翻訳する際、筆者の確認ミスで翻訳し忘れてしまった関係で、ポルトガル語の質問票には4-4.という質問がなくなってしまったからである。故にここだけＮ＝30となる。つまりは、日本語のアンケート用紙に日本語で答えることができる能力を持った子弟30人の内26名は学校の友達以外の友人のネットワークを持っていることがわかる。その友人関係の内訳は日本人６人、ブラジル人13人、いろいろ６人となる。この質問に続く4-5.「友達と遊ぶ時は『どこで』『何を』して遊びますか？」という質問に対しては、自分の家か友人の家で、ファミコン・ビデオゲームをしたり、外のゲームセンターで遊んだりする子弟が特に多い。ただ話をしたり、公園でおにごっこ、かくれんぼ、ぶらんこ等を遊ぶとした子弟も多い。

この前にある質問4-1.「学校の帰りにいつも一緒に帰る友達はいますか？」4-2.「学校が終わってから友達と遊ぶことはありますか？」4-3.「日本語や勉強を教えてくれる友達はいますか？」の結果については、「はい」と答えた子弟数がそれぞれ52名（小学生＝39名、中学生＝13名）、52名（小学生39名、中学生＝13名）、45名（小学生＝30名、中学生＝15名）となっている。

4-1.の結果から、72人の子弟の内、約７分の５を占める52名が共に帰る固定の友人を持っていることがわかる。また、4-2.で「はい」と答えた52名の内17名は主に日本人と遊んでおり、９名はブラジル人、25名は「いろいろ」な人と遊んでいる。このことから、少なくとも42名（約60%）はブラジル人以外の遊びのネットワークを持っていることがわかる。更に、4-3.で「はい」と答えた45名の内24名は日本人から日本語や勉強を教えてもらっており、10名はブラジル人、10名は「いろいろ」な人から勉強等を教えてもらっている。このことから、少なくとも34名（約半分）の子弟はブラジル人以外の友人から日本語や勉強を教えてもらえるネットワークを持っていることがわかる。ちなみに学習に必要と考えられる日本語能力（「聞く」「話す」「読む」「書く」）がすべて「おおむねできる」と日本語教育担当教員から評価され、かつアンケートにも答えてくれた14人の小学生児童の内10人はブラジル人以外の友人のネットワークを持っている。また、同様に評価された中学生４人は全員ブラジル人以外のネットワークを持っている。このことから、ブラジル人以外の友人のネットワークを築いていけることと日本語能力の向上との間には何らかの（プラスの）相関がありそうであることがわかる。

◇学校の中で一番好きな時間は？

１位は休み時間（23名：小学生＝18名、中学生＝５名）、２位は体育（22名：小学生＝14名、中学生＝８名）、３位はその他（14名：小学生＝10名、中学生＝４名で、その内訳は生活、日本語教室、算数等）となっている。ことば、つまり日本語をあまり介さない時間が好まれているようである。

◇学校の中で一番嫌いな時間は？

１位は勉強の時間（31名：小学生＝21名、中学生＝10名で、特に国語、社会、算数）、２位はその他（16名：小学生＝11名、中学生＝５名で、その内訳は朝礼、道徳、日本語教室など）、３位は体育の時間（11名：小学生＝９名、中学生＝２名）となっている。ことば（日本語）を介した授業や日本的なしきたりや風習（朝礼、道徳、体育）を強制される可能性が高い授業が好まれていないことがわかる。

◇あゆみの会について

回答してくれた子弟70名の内、「あゆみの会（ボランティアの日本語教室）」

の存在を知っていたのは約３分の１の25名（小学生＝13名、中学生＝12名）でしかない。少なくとも半分の子弟は知っているだろうと予想していたが、案外知られていないようである。基本的に「あゆみの会」のボランティア活動は、火曜日の夜と水曜日の昼間に東毛学習センターという太田駅から徒歩で約20分の場所で行われている。移動手段として公共交通よりも車（自家用車）の方が普通（ちなみに一家族あたりの群馬県の自家用車保持台数は全国１位だそうである）とされている太田市のような地方都市では、公共の交通機関（駅など）から遠い（不便な）場所にある「あゆみの会（東毛学習センター）」の存在はいまだ身近ではないのかもしれない。つまり、その存在をたとえ知っていたとしても、彼ら子弟にとって自分自身の足で通いにくい所となってしまっているのかもしれない。

４．おわりに ── 外国人児童・生徒受け入れにあたっての課題

4-1.分析結果のまとめ

これまでの考察や調査の結果から、ブラジル人児童・生徒の言語生活および彼ら子弟に対する言語（日本語）教育に関する分析結果をまとめると、次のように整理できよう。

（１）滞在年数と言語能力

・就学以前に来日して５～６年たつと日本人の子弟と肩を並べる学習言語能力が習得できるのではないかという予測が立つ。長期滞在するならば、小学校の場合、１年生から入学した方が子弟の健やかな成長のためには良さそうだという予測も立つ。

・大宮市の場合と比べれば、書くことおよび読むことに関しては、教科学習上の困難さを感じる子どもは少ないが、やはり、日本語は日常会話では使用されるが、「読み書き」を含んだ（認知・学習言語能力＝CALPを必要とする）自己表現手段としてはまだ充分に活用されていない。

・すべての学習言語能力（ＣＡＬＰ）が「おおむねできる」と評価された子弟の平均滞日年数は４年。

・会話能力（ＢＩＣＳ）が「おおむねできる」と評価された子弟の平均滞日年数は３年であった。

（２）言語の使い分けとバイリンガリズム

・日本語とポ語の混じった言語環境である学校生活と、主として母語を使う家庭での生活との間を交互に移動しながら、家庭の内と外・相手によって言語（母語と日本語）の使い分けをしている。

・父母とは母語で話す子どもが圧倒的に多く、兄弟・姉妹間では、日本語ある

いは両言語併用で話す子弟が多い。なお、小学生の場合、母親とは母語で話す子弟が多い。

・母語話者だけで話をしている場合にも日本語で話す子弟が５分の１近くおり彼ら子弟の滞日平均年数は５年以上である。

・自己を表出する場面においては、日本語か両言語併用の子どもが多い。ただ食事に関しては、他の状況（夢・数・叫び・けんか）と比べてポ語を使う子弟が多い。なお、夢が日本語に変わるのには最も時間がかかる。

・他の地域の子弟のように「日本語に囲まれて徐々に母語話者同士でも使わなくなりやがて忘れていく」ということが頻繁に起きそうもない。両方の言語を使うという子弟が多く、母語をほとんど使用していなかった大宮市の子弟場合と比べると、太田市の子弟の方がバイリンガル児として育つ可能性が大きそうである。

（３）子弟の将来に関して

・40％近い子弟が日本に残りたがっている。なぜ、日本にいたいかというと、中学生は経済的理由が大きく、小学生は友人とのネットワークの維持のためが大きい。こうした生活する場所に関する子弟の意識と両親の意識とは大いに相関がありそうである。

・バイリンガルになりたいと考えている子弟が圧倒的に多い。大半の両親もバイリンガルにさせたいと思っているが、その理由は「子供の将来にのため」というものが多い。

・子弟も両親も高学歴を希望しており、どちらかというと両親（特に父）の期待が大きい。その一方で、職業に関しては、「人の役に立てば……」位で、特に望んではいない両親が多い。アンケートに答えてくれた人の数からも、父親の教育に対する意識の高さぶりがうかがえる。

（４）学校・地域におけるネットワークと言語教育問題

・太田市というブラジル人が大変多い地域の場合、日本人（日本文化）とあまり接触しなくても、ある程度日本語能力をつけることができる。

・ブラジル人以外の友人のネットワークを築いていけることは、日本語能力を伸ばすことにも役立つことがわかる。

・学校の時間で嫌われている科目は「ことば」を介する授業や日本の文化・風習を押しつけられるようなものが大半を占めている。好きなものはその逆でほとんど日本語を介さない（高いコンテキストで低い認知力）ですむ科目となっている。

・「あゆみの会」を知っている者は子弟も両親も約３分の１でしかない。

・文化に関しては、日・ブ両方の文化を大切にしたい者が圧倒的。バイリンガ

リズムが醸成されやすい地域と言えよう。

・「学校内および学校間における教師同士の横の繋がりやネットワークの大切さ」を訴える教員が多い。

こうした（１）～（４）の分析結果のまとめを踏まえた上で、最終的に、日本の小・中学校が外国人児童・生徒を受入れる際に期待される教育課題を提示したいと思う。

4-2. 外国人児童・生徒受け入れにあたっての課題

最後に、上記の分析結果を踏まえて、日本の地域社会の小・中学校が外国人児童・生徒を受け入れる際に期待される教育課題（５点）を提示しておきたい。

（１）土曜日の開放教室等の実施実現も含めた、母語（文化的アイデンティー）保持教育への経済的・人的援助（講師・教員の養成や派遣など）。ただし、母語（ポ語）を「学ぶか」「学ばないか」という「選択の自由」の権利は、理想（原則）的には、児童・生徒本人に与えることが望ましい。こうした母語への配慮と並行して、例えば、「帰国予定者－長期滞在・永住希望者」別に日本語教育を行うことも一案である。更に、彼らの母語・母文化の維持・尊重（子どもの権利：学習権）という観点から、学校内での母語使用や母語教育の可能性を検討し、日本語や英語のみに偏らない多様な言語の使用を可能にする教育環境を醸成していく方策が求められる。

（２）長期・継続的な計画の下で、日本語担当教員および児童・生徒の母語も理解できる教師やカウンセラーの育成へ向けての補助。太田市の場合、特に他の地域よりもバイリンガリズムが醸成されポ語（L1）を維持しやすい環境があると思われるので、学校教育現場の要望に応じて、日本語教員の養成や再訓練へ向けての研修・ワークショップの場をより積極的に設ける事も大切だと思われる。学校内での教育実践においては、教員間の連携・協調を常に図りながら、児童・　生徒の言語能力やパーソナリティーに応じて、言語－非言語のコミュニケーション方法を適宜組み合わせていく更なる工夫が必要である。例えば、子弟の自国文化を紹介させること、体育や音楽といった言語介在の少ない授業において、彼らの能力や自己存在を顕在化させていくことなどは歓迎される方法であろう。

（３）子弟に対する言語教育の結果を２、３年間で評価するのは尚早であるし、そうした結果を早く求める焦燥感がやがては長い時間をかけて子弟の生活に芳しくない影響を与えることも予測される。そこで、これまで以上に生涯教育的

視点に立った教育活動を実施し、児童・生徒のセルフラーニング力の育む工夫をすることが期待される。日本語教育の活性化のためには、授業以外の場で、彼ら児童・生徒が、自分から進んで学ぶ動機を保持することや、自己管理能力を習得することが重要である。こうした動機を維持させ、学習を奨励するためにも、自文化・他文化に対する尊重や寛容性の維持・育成は大切となる。学校教育の指導教室レベル以外に、生涯教育（社会教育）のプログラムとして日本語・母語教育が組まれることが期待される。このプログラムには、①二世・三世、外国人児童・生徒、青少年の出身国、出身民族・コミュニティで使用される母語の教育、②伝統文化・生活様式の保存、学習なども繰り込まれることが欠かせないであろう。

（４）児童・生徒本人や教員・学校だけでなく、家族や地域社会の人々からの、多文化主義的な教育的視野に立った言語（日本語・母語）教育への理解と協力＝「協調」。各学校、地域ボランティア、外国人父母や日本人父母、企業・研究機関、行政機関の相互連携や協力のあり方が改めて問われてくることが予想される。故に、ボランティアによる「父母・保護者への日本語指導サービス」や、企業による「母語を解せる人材の派遣」なども期待される。

（５）今後、地域の人々の意識を更に多元的な方向へ導き、共生へ向けての施策の展開を更に漸進させてゆくためには、縦割りの関係性だけではなく、横のネットワークを広げていく必要がある。例えば、類似した問題を抱えた地域（浜松、豊橋等）との情報交換をより円滑化したり、継続的な情報提供や適切な情報開示をしてゆくことが市や国の行政に期待される。つまり、ニューズ・レター（活動を紹介する情報誌）の編集・作成、研修会の開催、コンピューター・パソコン（インターネット）などの活用等が今後は益々重要となるであろう。子どもたちの学習する権利を保障し、両言語の伸び悩みや精神的不安定化を防ぐためには、彼らの母語（第一言語）の認知・学習言語能力（CALP＝Coginitive Academic Language Proficiency）の維持・育成・強化が特に肝要であり、そのためには、周囲にいる人々（特に保護者・教員）の協力体制が不可欠と考えられるからである。

（註）

（１）筆者は群馬県太田市の地域日本語教育推進委員会（文化庁支援）の調査員の一人である。本調査のデータは、その子女教育調査班の活動として、筆者自身によって収集されたものである。平成６年度から始まった文化庁の支援による地域日本語教育事業は、神奈川県川崎市（平成６年～８年）、群馬県太田市（平成６年～８年）、静岡県浜松市（平成７年～９年）、山形県山形市（平成７年～９年）の四都市（地域）をモデル都市として、その地に応じた施策が徐々に展開されているが、その中でも特に日系南米人が多い都市（地域）として指定されたのが太田市である。この地域での調査活動へ誘って下さり、今回の調査データの活用を了承して下さった委員会の世話役の一人である国立国語研究所の柳沢主任研究員にまずは感謝申し上げたい。そして、これまで本調査の方法や内容に関してご指導頂いた諸先生方や研究員の方々に改めて感謝申し上げたい。更には、この調査・研究に協力して頂いた全ての方々に感謝致します。

（２）佐藤：1986、小林：1988、川上：1991、野山：1992、八代京子：1994、村田・池田・渋谷・山口：1994、志賀：1995、岡崎：1995、佐藤・中西：1995等参照。

（３）永井憲一・寺脇隆夫編(1990)『解説　子どもの権利条約』日本評論社参照。

（４）文部省の調査によれば、1991年９月１の時点で、日本の公立小・中学校に在籍する外国人児童・生徒中、日本語能力が不十分なために特別な日本語教育を必要とする者は小学生で3,978 人、中学生で1,485 人、受入れ学校数は各々1,437 校、536 校に上っていた。２年後の1993年９月１日の時点では、その数は更に増えて、小学生7,569 人（90.3%増）、中学生2,881 人（94.0%増）と、ついに、総数で１万人を超え、受入れ学校数も各々2,611 校（81.7%増）、1,094 校（104.1 %増）と、やはり倍近く増加した。太田市における増加も著しい（太田市資料の表４参照）。

（５）心理言語学や応用言語学の研究によれば、在日外国人児童・生徒への日本語教育つまり少数言語の児童・生徒の二言語発達に関しては、次のような仮説が提示されている（Ｌ１＝第一言語＝母語、Ｌ２＝第二言語＝日本語）。

「少数言語の子弟が高度な二言語の力を伸ばせるかどうかは、母語がどの位発達するかにかかっている。もし、思考力がまだ充分に育っていない場合には、Ｌ２における思考力を育てる基礎を欠くということになる」(Cummins: 1984,86)

従って子弟のリテラシーの力を育み、二言語使用の教育的効果をあげるためには、親が家庭でＬ１を強める努力したり、そのための補助を地域社会や学校が実施することが肝要となる。

（６）田渕：1991、マーハ・八代：1991、マーハ・本名：1994、ミラー：1994、ホリスティック教育研究会：1995、岩間・山西：1996等参照。

（７）例えば、1987年の４月に提出された臨時教育審議会第三次答申では、「日本の学校はどの学校においても引揚者子女を含む帰国子女や外国人子女を受け入れ、共に学んでいくことを基本として開かれた存在を目指していくべきであり、これらの子女の海外における経験が日本の学校・教育制度の中でも積極的に生かされ、さらに、国内の児童・生徒に対して、異文化理解の機会を与えるなど、相互に啓発し合う環境をつくっていくことが必要である」という積極的で多文化主義的な提言がなされた。この提言と前後して、特に帰国子弟の受入れに関しては、彼らから「異文化はがし」をするのではなく、むしろそれをプラスと捉え活用させるという方向に向かっているが、外国人子女（子弟）の対応に関しては未だ不充分な状況にある。なおこうした状況に対応して、日本語教育政策のあり方について改めて多元的な視角から言及した論稿としては、水谷（1995）やNoyama(1995)等がある。

（８）ここでは、社会言語学の先行文献（任：1993　および　真田・渋谷・陣内・杉戸：1992）を参照しながら、単純に「種々の言語行動の積み重ねの上に見る総体としての言語運用状況」と考えたい。具体的には、言語接触（母語への意識や母語学習体験）、言語能力（日本語能力：日常会話、教室での学習のための「聞く」「話す」「読む」「書く」能力）、言語意識（二言語併用に関する意識）、言語行動（ことばの使い分け）、言語変容（数の数え方や夢の中での言語など）についてアンケートおよびフォローアップインタビュー等を通して考察することとする。

（９）実際には、柳沢（1995:99､）によれば、フィリピンや中国出身の日本人の配偶者または子（在留資格）の外国人登録者数が年々増加しているのに比べ、就労目的の日系人が中心のブラジルやペルー出身者の伸びは鈍化しているが、全体としては伸びていることに変わりはない。配偶者または子（在留資格）の外国人登録者数は、全体で23万1561人で、前年比4.1 %の増加であり、国籍別に見ると、ブラジルが９万5139人、フィリピンが３万6435人、韓国・朝鮮が２万1750人となっている。

(10) 太田市が発行している月報（太田市資料参照）によれば、1995年10月当時、48カ国出身の合計4,480 人の外国人が居住（登録）していたが、その内約半分（49.7%）の2､227 人がブラジル出身の者である。以下、フィリピン（599 人:13.4 %）、中国（515 人:11.5 %）、韓国・朝鮮(373人:8.3%）、ペルー（288 人:6.4%）と続いている。この上位５国で約９割（89.3%）を占めていることがわかる。また、1995年9 月の時点（太田市資料参照）では、合計150 人（５月から13人増加）の外国人子女が就学しており、その内約７割の104 人をブラジル人子弟が占めている。

(11) 箕浦康子（1984）参照

(12) 中島和子（1983）参照。

(13) 波多野誼余夫編（1980）、 Dickinson (1987)、平井雷太（1990）等参照。
言語能力の向上に不可欠なものの一つとして、セルフラーニング力の育成があげられよう。平井（セルフラーニング研究所代表）によれば、学習者との対話（学習計画）の中で、指導者が一貫して「押しつけない・強制しない・命令しない」指導を貫き、徹底して子どもの自主性と自由選択権（自己責任）に任せる「セルフラーニング」＝「らくだ式学習法」を実践することで、多くの子どもたちが、自分から進んで（自分なりに学ぶ動機を明確化して）学習する力を習得しているという。こうしたセルフラーニング力は、筆者が今年３月に訪問したオーストラリア、メルボルンの補習校（メルボルン国際日本語学校）のＴ校長先生も、「英語（第二言語）圏に居住する日本人子弟にとって最も必要な力の一つである」と言っておられた。日本における在日外国人児童・生徒も、日本語つまり第二言語圏に居住しているという意味では同様の立場にあると考えられる。だとすれば、学習という行為の根幹にあると考えられる自主学習力を育成していくための工夫を教育の現場で施すことは彼ら子弟にとっては福音となろう。例えば、「日本語を教える」という発想ではなく「日本語でセルフラーニング力をつける」という発想に切り替えて処方箋（教授方法や教材の開発）を考えてみることも必要であろう。

(14) Wenden & Rubin (1987)、Oxford(1990)、Wenden (1991)、Baker(1993) 等参照。

参考文献

朝倉征夫(1995)『多文化教育』成文堂

任栄哲（ｲﾑ･ﾖﾝﾁｮﾙ)(1993)『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版

岩間浩・山西優二編(1996)『わかちあいの教育 ― 地球時代の「新しい」教育の原理を求めて ― 』近代文芸社

江淵一公・小林哲也編(1985)『多文化教育の比較研究』九州大学出版会

岡崎敏雄(1995)「年少者言語教育研究の再構成 ― 年少者日本語教育の視点から」『日本語教育86号』日本語教育学会 pp.1-12.

川上郁雄(1991)「在日ベトナム人子弟の言語生活と言語教育」『日本語教育』73号 pp.154-166.日本語教育学会.

子どもの権利条約ネットワーク編(1994)『子どもの権利条約 ― 学習手引き ― 』エイデル研究所

小林悦男(1988)「中国帰国者に対する日本語教育」『日本語教育』65号、日本語教育学会

佐藤郡衛・中西晃編(1995)『外国人児童・生徒教育への取り組み』教育出版

佐藤三郎編著(1986)『世界の教育方法改革』東信堂

真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹著(1992)『社会言語学』桜楓社

志賀幹郎(1995)「第二言語教育としての日本語教育とバイリンガリズム」国際基督教大学日本語教育プログラム日本語教育センター編『日本語教育の課題：ＩＣＵ日本語教育四十周年記念論集』pp.24-37. 東京堂出版

ジョン・Ｃ・マーハ、本名信行編著(1994)『新しい日本観・世界観に向かって ― 日本における言語と文化の多様性』国際書院

ジョン・Ｃ・マーハ　八代京子編著(1991)『日本のバイリンガリズム』研究社出版

ジョン・Ｐ・ミラー著、吉田敦彦・中川吉晴・手塚郁恵訳(1994)『ホリスティック教育 ― いのちのつながりを求めて ― 』春秋社

田淵五十生(1991)『在日韓国・朝鮮人理解の教育』明石書店

永井憲一・寺脇隆夫編(1990)『解説　子どもの権利条約』日本評論社

中島和子(1992)「バイリンガル児とアイデンティティーの獲得」『月刊言語 9』Vol.21 No.10. 大修館書店

野山　広 (1992)「在日外国人子弟への言語教育に関する多文化教育的一考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第三号

波多野誼余夫編(1980)『自己学習能力を育てる』東京大学出版会

平井雷太(1990)『セルフラーニング　どの子にも学力がつく』新曜社

文化庁 (1995)『新「ことば」シリーズ１　国際化と日本語』

ホリスティック教育研究会編(1995)『実践ホリスティック教育』柏樹社

水谷修 (1995)「日本語教育政策 ― 日本語教育全般について ― 」『日本語教育86号別冊』日本語教育学会 pp.9-21.

箕浦康子(1984)『子供の異文化体験』思索社

村田翼夫・池田充裕・渋谷恵・山田千明(1994)「外国人児童受け入れ校における教育実践とその課題 ― 南米日系人居住地域と学園都市地域との比較調査を通して ― 」日本比較教育学会編『比較教育学研究２０』東信堂 pp.63-80.

文部省(1992)「日本語教育が必要な外国人児童・生徒の受け入れ・指導の状況について」

八代京子(1994)「帰国生と移民の言語 ― 多言語社会の言語教育の観点から」ジョン・Ｃ・マーハ、本名信行編著(1994)『新しい日本観・世界観に向かって ― 日本における言語と文化の多様性』国際書院 pp.100-115.

柳沢好昭(1995)「数字から見た外国人居住者と地域」『日本語教育86号別冊』日本語教育学会 pp.94-107.

BIBLIOGRAPHIES

Baker, C. 1993, Foundations of Bilingual Education and Bilingualism, Multilingual Matters.

Cummins,J. 1984, Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy. Clevedon: Multilingual Matters.

— . 1986, Empowering minority students: A framework for intervention. Harvard Educational Review 56(1), 18-36.

— . 1989, Language and literacy acquisition. Journal of Multilingual and Multicultural Development 10 (1), 17-31.

Cummins, J. and Swain, M., 1986, Bilingualism in Education. Longman.

Dickinson, L., 1987, Self-instruction in Language Learning, CUP

Nakajima K., 1983, Age Factor in Mother Tongue Mainatenance and in the Development of English Proficiency of Overseas Japanese Children. In Theory, Technology and Public Policy in Bilingual Education. Washington DC: National Clearinghouse for Bilingual Education.

Noyama, H. 1995, Attitudes toward Bilingual and Multicultural Aspects of Japanese-Language Policy and Teaching to Non-Native Children in Japan. Japanese-Language Education around the Globe, Vol.5, pp.1-27. The Japan Foundation Japanese Language Institute.
(邦題：「日本語教育政策と多文化主義： 外国人児童・生徒への第二言語としての日本語教育の確立を目指して」『世界の日本語教育』第５号，国際交流基金日本語国際センター)

— 1995b , Surveying Student Beliefs About Japanese Language Learning: A Case Study of the Significance of Studying Students Beliefs at A Grammar School in Melbourne. Nihongo Kyooiku Ronshuu, 12, pp.61-90. Center for the Teaching Japanese as a Foreign/Second Langugae at N.L.R.I.
(邦題：「JFL 場面における「ビリーフス」調査の重要性と活用に関する一考察：メルボルン地区の高校生の場合を事例として」『日本語教育論集 12』国立国語研究所日本語教育センター)

Oxford, R. 1990, Langauge Learning Strategies. Newbury House.

Wenden, A. 1991, Learner Strategies for Laerner Autonomy. Prentice Hall.

Wenden, A. and J. Rubin., 1987, Learner Strategies in Language Learning. Prentice Hall.

付　表１－１
太田市の事例

児童・生徒へのアンケート
小・中学校児童・生徒編

表１．子弟の母語

母　語	ポルトガル語
人　数	８１

性別のうちわけ：男子35人、女子37人　未回答 9人
回答者７２人の両親の母語のうちわけは以下の通り。

	父母ともポルトガル語	父母のどちらかが日本語	父母とも日本語
人数	63	5	4

表２．子弟の年齢と在籍学年（担当教員が日本語能力を評価した子弟の数：アンケートに回答してくれなかった児童の数も含まれている）

年齢(N=81)

年　齢	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
人　数	4	10	9	7	12	13	6	5	9	5	1	0

在籍学年 (N=81)

学　年	小学校	1	2	3	4	5	6	中学校	1	2	3
人　数		14	8	7	9	15	8		5	10	5

表３．子弟の来日時の年齢（アンケートに回答してくれた児童のみ: N=72)

年　齢	0 ～ 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人　数	3	2	3	3	2	9	5	8	9	9	10	6	1	2	

表４．子弟の滞日年数（例えば、年数１の意味は１年以上２年未満: N=72)

年　数	1 年未満	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人　数	25	9	7	13	10	5	2	0	0	0	1

表９．将来についての考え（Ｎ＝７２）

	ブラジル	日本	他の国	どちらでも	わからない
１．生活する場所	34	21	2	3	12

理　由

ブラジル：ブラジル人だから。
自分の国だから。
にほんごがあまりわからないから。
ブラジルの方が楽しいから。
生まれた国だし（２人）、ブラジルが好きだから。
私の国だし、日本で覚えたことをブラジルで使いたい。
日本語を覚えるうちにポルトガル語を忘れているから。
日本もブラジルも好きだからです。金にあまりこまらないから。
自分の将来にあった国だと思うから。
ブラジルに帰りたいけど日本にもいたい。

日本：ポルトガル語はよく分からない、日本の生活に慣れたから。
日本が楽しい（２人）。
いとこがいる、犬がかえる。
おばあちゃんに会いたいから。
たのしいから（２人）。
ともだちがいっぱいいるから（２人）。
にほんの方がすきだから。
ブラジルはおもしろくないから。
ゲームができるから。

	バイリンガル	日本語	母語	わからない	無回答
2．言語意識	56	5	4	6	1

理　由

バイリンガル：日本語も勉強したいし、ブラジル人だからポルトガル語もやりたい。
ブラジルに帰った友達と話しをしたい。
ブラジルでも日本語でも話せるようになりたい。
忘れないように。
ブラジル人と遊べるから。
ブラジル人とにほんじんとはなせるから。
しごともかんたんにみつかるから。
おうちの人が日本語がわからない、教えたい。
こどもじゃないから両方つかえた方がよい。
友達や先生に手紙を書くため。
両方覚えたらチャンスがあるから（２人）。
帰りたくないから。
興味があるから。将来のことを考えて。
大人になったら必要になる。
同じように使えたらどっち国にいても大丈夫だから。
便利だから。何となく。

	中学	高校	大学	大学院	わからない
3．学　　歴	09	10	22	12	19

4．職業
スポーツ関係：サッカーの選手（３人）、バレーボール、陸上、野球
天文学者、コンピューター関係（４）、歌を歌いたい。
スーパーで働きたい、エンジニア、先生（２）車の鏡を作る仕事、
おもちゃ屋さん、イルカの先生（調教師）になりたい、トラックの運転手、
工場で働く、建築家、エンジニア、医者、歯医者

表10．現在の生活に関して（Ｎ＝７２）

1．ポルトガル語の維持教室について

	は　い	いいえ	わからない	無回答
1-1.ポ語に興味がある	36	26	09	1

	は　い	いいえ	わからない	無回答
1-2.教室があったらいい	43	07	21	1

	は　い	いいえ	無回答
1-3.通ったことがある	13	58	1

理　由
(a:自分から 5) (b: 親から言われた 5) (d: わからない 2) (c: 友人から 1)

	は　い	いいえ	無回答
1-4.今も通っている	07	05	01

2．文化に対する考え方（Ｎ＝７２）

a.日・文化＋ブ・文化	45
b.日本の文化	03
c.ブラジルの文化	04
d.わからない	18
無回答	02

3．日本に来てから日本語以外のことで困っていること
漢字（４人）、気候（５：冬が寒過ぎるし、夏が暑過ぎる）、
習慣や風習の違い（３人）、コミュニケーション（４）、　友達（２）、
勉強（４人：英語、算数など）、なっとうが食べられない、文化の違い

付　表１－２
太田市の事例

両親へのアンケート
小・中学校児童・生徒編

表11．こどもの教育問題に関して（N=53）

	ブラジル	日本	他の国	どちらでも	わからない	無回答
1．生活する場所	25	10	02	06	09	01

	バイリンガル	日本語	母語	わからない	無回答
2．言語意識	47	03	01	01	01

理由：チャンスがある、話せるものははなせた方が良い、
今後のますます国際化社会を考えた時、すべてに有利と思われる。
こどもの将来のため
できるだけたくさんのくにのことばをおぼえてほしい。

3．ポルトガル語の維持教室について

	は　い	いいえ	わからない
3-1.ポ語に興味がある	46	04	03
3-2.教室があったらいい	50	02	01

	は　い	いいえ
3-3.通わせたことがある	07	46

4．文化に対する考え方（無回答１）

a.日・文化＋ブ・文化	49
b.日本の文化	03
c.ブラジルの文化	00
d.わからない	00

5．こどもの学歴に関して

	中　学	高　校	大　学	大学院	わからない	無回答
学　　歴	04	04	17	16	09	03

6．こどもの将来の職業について
電気技師、シビル・エンジニア。えんかかしゅになってほしい。
本人の意志に任せる。人様の為になる職業を。
本人の意志で選択するならなんでもよい、親としてはとくにない。
あくまで本人の意思を尊重したい。

表12．現在の生活に関して（N=53）
1．日本に来てから困っていること
言葉（日本語）の問題（７人）、漢字（２人）、いじめの問題、
生活費が高いこと。とくにありません、むすめはよくなじんでいます。
社会的、文化的コミュニケーションのとり方。
こども本人の勉強意欲が下がっていること。

2．あゆみの会について（無回答１）
知っていますか　はい 11　いいえ 41
参加していますか　はい 05　いいえ 03　無回答 03
何を勉強していますか　日本語（２）

主な回答者：　父 11　母 17　両方 24　回答なし 1

付　表　２

担当教師（講師）へのアンケート比較

表１．学校教育における言語状況①（大宮市の子弟の場合；Ｎ＝１８）

	全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
聞く力	0	6	10	2
話す力	0	8	8	2
読む力	0	10	6	2
書く力	2	9	5	2

表２．学校教育における言語状況②（国際救援センターの場合；Ｎ＝１２）

	全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
聞く力	1	3	6	2
話す力	1	7	2	2
読む力	1	7	2	2
書く力	1	9	0	2

表３．学校教育における言語状況③（促進センターの場合；Ｎ＝６）

	全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
聞く力	0	2	0	4
話す力	1	1	0	4
読む力	1	1	0	4
書く力	1	1	0	4

表4-1.小学生：学校教育における言語状況④（太田市の児童の場合；Ｎ＝61）

	全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
聞く力	2	22	37	0
話す力	17	10	31	3
読む力	19	21	21	0
書く力	23	15	23	0

表4-2.小学生：日常会話における日本語の理解状況（太田市の児童の場合：Ｎ＝61）

全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
2	23	35	1

表5-1.中学生：学校教育における言語状況④（太田市の生徒の場合；Ｎ＝20）

	全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
聞く力	4	7	9	0
話す力	4	10	6	0
読む力	6	10	4	0
書く力	5	11	4	0

表5-2.中学生：日常会話における日本語の理解状況（太田市の生徒の場合：Ｎ＝20）

全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
2	3	15	0

表6-1.小・中学生：学校教育における言語状況④（太田市の児童・生徒の場合；Ｎ＝81）

	全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
聞く力	6	29	46	0
話す力	21	20	37	3
読む力	25	31	25	0
書く力	28	26	27	0

表6-2.小・中学生：日常会話における日本語の理解状況
（太田市の児童・生徒の場合：Ｎ＝81）

全くできない	少しできる	おおむねできる	無回答
4	26	50	1

表７．質問２（異文化の人々との共存）への回答
（大宮市：Ｎ＝８　救援センター：Ｎ＝12　促進センター：Ｎ＝６　太田市：Ｎ＝11）

	プラス	マイナス	どちらともいえない	無回答
大宮市	7	0	1	0
救援センター	11	0	1	0
促進センター	2	0	4	0
太田市	11	0	0	0

表８．質問３（母語教育）への回答（Ｎは、表７と同様）

	必　要	不必要	どちらともいえない	無回答
大宮市	7	1	0	0
救援センター	11	1	0	0
促進センター	5	0	1	0
太田市	10	0	1	0

表９．質問４（Ｅ．Ｓ．Ｌ．クラス）への回答（Ｎは、表７と同様）

	必　要	不必要	わからない	無回答
大宮市	6	0	1	1
救援センター	7	1	4	0
促進センター	4	0	2	0
太田市	5	0	6	0

注；必要と答えた者（大宮市＝６名）の中に１名不可能と答えた者がいた。

表10．質問５（カウンセラー）への回答（Ｎは、表７と同様）

	必　要	不必要	どちらともいえない	無回答
大宮市	6	0	1	1
救援センター	11	0	1	0
促進センター	6	0	0	0
太田市	6	0	5	0

表11．質問６（国際理解教育・多文化教育）への回答（Ｎは、表７と同様）

	必　要	不必要	どちらともいえない	無回答
大宮市	4	1	1	2
救援センター	8	3	0	1
促進センター	4	1	0	1
太田市	5	0	6	0

付　録　１－１

外国人児童・生徒へのアンケート

あなたの背景に関する調査

1．氏名
2．性別
3．来日時の年齢
4．滞日年数（年月）
5．親御さんの母語（第一言語）　　父　　母

言語の使い分けに関して

次の相手としゃべる時、いつも（主に）何語（母語／日本語）を使いますか？

1．家族の中で、次の人に対しては何語を使いますか？
　父に対して　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない
　母に対して　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない
　兄姉に対して　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない
　弟妹に対して　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない

2．家族以外の人で、次の人に対しては何語を使いますか？
　大人や目上の人に対して
　　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない
　同一年齢あるいは年下の人
　　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない

3．遊んでいる時、次の場合は何語を使いますか？
　母国人同士だけ
　（例：ブラジル人同士だけ）
　　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない
　日本人も一緒にいる時
　　ポルトガル語（母語）／　日本語　／　半々　／　わからない

状況による使い分け

次の状況では、主に何語（母語／日本語）を使いますか？
（もし、日本語だとしたら、いつ頃、母語から日本語へと変わりましたか？）

1．夢を見る時
　ポルトガル語（母語）／　日本語（　　頃）／　半々　／　わからない
2．数を数える時
　ポルトガル語（母語）／　日本語（　　頃）／　半々　／　わからない
3．叫ぶ時（驚いた時、危険が迫った時などに、喜怒哀楽を強調する時）
　ポルトガル語（母語）／　日本語（　　頃）／　半々　／　わからない
4．けんかをする時
　ポルトガル語（母語）／　日本語（　　頃）／　半々　／　わからない
5．家族と食事をする時
　ポルトガル語（母語）／　日本語（　　頃）／　半々　／　わからない

将来についての考え

1．自分が将来生活する場所についてどう考えていますか？
　a.ブラジルに帰りたい／b.日本にいたい／c.他の国／d.どちらでもよい／e.わからない

　その理由は何ですか？

　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2．日本語／母語（ポルトガル語）教育に関してどう考えていますか？
　a.バイリンガル（日本語もポルトガル語も同じように使えるような人）になりたい
　b.日本語をきちんと習得できれば、母語（ポルトガル語）は忘れてもしょうがない
　c.日本語の習得よりも、母語（ポルトガル語）能力を保持し、レベルアップさせたい
　d.わからない

　その理由は何ですか？

　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．自分の教育（学歴）に関してどう考えていますか？
　a．中学卒業で十分
　b．高校卒業で十分
　c．大学までいきたい
　d．できれば、大学院までいきたい
　e．わからない

4．将来どんな職業に就きたいですか？

<u>現在の生活に関して</u>

1．ポルトガル語の維持（保持）教室や塾についてどう思いますか？

1-1.ポルトガル語の教室や塾に興味がありますか？
は　い　／　いいえ　／　わからない

1-2.ポルトガル語の維持教室が太田市にあったらいいと思いますか？
は　い　／　いいえ　／　わからない

1-3.太田市あるいは大泉にあるポルトガル語の塾に通ったことがありますか？
は　い　／　いいえ

「はい」と答えた人だけ答えて下さい。
その塾にはなぜ通ったのですか？
a.自分から進んで通った。
b.親から言われたので通った。
c.友人が行っていたので何となく通った。
d.わからない

1-4．今もそのポルトガル語の塾に通っていますか？
は　い　／　いいえ

2．次の考え方の内、どの考え方にあなたは賛成ですか？
a.日本の文化も大切だが、ブラジルの風習や習慣も同じように大切にしてゆきたい。
b.日本に住んでいるのだから、ブラジルの風習や習慣は忘れても仕方がない。
c.日本の文化よりもブラジルの風習や習慣の方が大切だと思う。
d.わからない

3．日本に来てから日本語以外のことで困っていることは何ですか？

4．友人とのつきあいに関しての質問

4-1.学校の帰りにいつも一緒に帰る友達はいますか？
は　い　／　いいえ

4-2.学校が終わってから友達と遊ぶことはありますか？
は　い　／　いいえ
「はい」と答えた人は、主に誰（どんな友達）と遊びますか？
日本人　／　ブラジル人　／　他の国　／　いろいろ

4-3.日本語や勉強を教えてくれる友達はいますか？
は　い　／　いいえ
「はい」と答えた人は、主に誰（どんな友達）が教えてくれますか？
日本人　／　ブラジル人　／　他の国　／　いろいろ

4-4.学校の友達以外に友達はいますか？
は　い　／　いいえ
「はい」と答えた人は、どんな友達がいますか？
日本人　／　ブラジル人　／　他の国　／　いろいろ

4-5.友達と遊ぶ時は、主に「どこで」「何を」して遊びますか？

4-6.学校の中で一番好きな時間は何の時間ですか？
勉強　／　給食　／　休み時間　／　体育　／　その他（　　の時間）

4-7.学校の中で一番嫌いな時間は何の時間ですか？
勉強　／　給食　／　休み時間　／　体育　／　その他（　　の時間）

4-8.あゆみの会を知っていますか？
は　い　／　いいえ
「はい」と答えた人は、あゆみの会に参加していますか？
は　い　／　いいえ
「はい」と答えた人は、あゆみの会で何を勉強していますか？

ご協力ありがとうございました。

Enquete para os Estudantes Infanto–Juvenis

Esta enquete foi elaborada pelo Instituto de Pesquisa Lingüística Nacional e tem a finalidade de investigar o grau de adaptação dos nikkeis nesta região,bem como as necessidades do estudo da língua japonesa.

Os resultados desta pesquisa não serão utilizados de maneira alguma para outras finalidades além dos citados acima.

Contamos com a colaboração de todos.

1.Nome completo: _____

2.Sexo: M / F

3.Sua idade quando chegou neste país:

4.Tempo de estadia neste país(Ano/Mês):

5.Língua nativa dos pais: Pai

Mãe

Em relação ao uso do idioma:

Qual a língua(Língua Nativa/Língua Japonesa) mais usada nas seguintes situaçaões?

1.Dentro da família,com as seguintes pessoas:

1–1.Pai:

a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

1–2.Mãe:

a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

1–3.Irmãos mais velhos:

a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

1–4.Irmãos mais novos:

a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

2.Fora da família,com as seguintes pessoas:

2–1.Adultos e superiores:

a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

2–2.Pessoas da mesma idade ou mais novos:

a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

3.Quando está brincando,nas seguintes situações:
3-1.Somente com colegas do seu país(Ex:Somente brasileiros):
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

3-2.Com brasileiros e japoneses:
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

Em relação a escolha do uso da língua de acordo com a situação:
Em geral,qual a língua(Língua nativa/Língua japonesa) usada nas seguintes situações:
(Em caso de a resposta ser a Língua japonesa,à partir de quando mudou de língua nativa para a japonesa?)

1.Quando sonha:
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

2.Quando conta(Números):
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

3.Quando chama(Quando se assusta,está em perigo,deseja enfatizar o estado psicológico):
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

4.Quando briga(Discute):
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

5.Durante a refeição(Com a família):
a)Português(Língua Nativa)
b)Japonês
c)Meio à meio
d)Não sei

Em relação ao futuro:
1.Qual o pensamento em relação ao seu futuro?
a)Gostaria de voltar para o Brasil
b)Gostaria de viver no Japão
c)Tanto faz
d)Não sei
Motivo:_____

2.O que acha sobre a educação da língua japonesa/língua nativa(português)?
a)Gostaria de se tornar bilíngüe(dominar tanto o japonês como o português).
b)Acho inevitável esquecer a língua nativa(português) em caso de conseguir aprender o japonês.
c)Prefiro me esforçar nos estudos da língua nativa(português) do que nos estudos da língua japonesa.
d)Não sei.
Motivo:_____

3.O que pensa em relaçao a sua educação(histórico escolar)?
a)Será suficiente conseguir concluir o ginásio(Chuugakkou).
b)Será suficiente conseguir concluir o 2o.Grau(Koutougakkou).
c)Gostaria de estudar até a universidade(Daigaku).
d)Se for possível,gostaria de fazer até a pós-graduação.
e)Não sei.

4.Futuramente,gostaria de trabalhar em que tipo de profissão?

_____

Em ralação ao dia-a-dia atual:

1.O que acha em relação aos cursinhos e escolinhas de português?
1-1.Possui interesse em cursinhos e escolinhas de português?
a)SIM. b)NÃO. c)NÃO SEI.

1-2.Gostaria que tivesse cursinhos e escolinhas de português em Ohta ou Oizumi?
a)SIM. b)NÃO. c)NÃO SEI.

1-3.Já freqüentou cursinho ou escolinha de português em Ohta ou Oizumi?
a)SIM. b)NÃO.

Para os que responderam (SIM):
Por que freqüentou este cursinho de português?
a)Por iniciativa própria.
b)Por vontade dos pais.
c)O colega estava freqüentando e,acabei indo junto.
d)Não sei.

1-4.Atualmente,continua freqüentando este cursinho de português?
a)SIM. b)NÃO.

2.O que acha em relação a preservação da cultura nativa(Cultura brasileira:costumes,hábitos,folclores,etc.)
a)A cultura japonesa é importante porém, acho a cultura brasileira igualmente importante e gostaria de mantê-la.
b)Acho inevitável esquecer a cultura brasileira considerando que estou vivendo no Japão.
c)Acho a cultura brasileira mais importante do que a japonesa.
d)Não sei.

3.Qual é a dificuldade além da língua japonesa encontrada neste país?

_____

4.Em relação a amizade:

4-1.Possui amigos que voltam junto da escola com você?
a)SIM. b)NÃO.

4-2.Brinca com os amigos após o término da escola?
a)SIM. b)NÃO.

Para pessoas que responderam (SIM):
Geralmente brinca com quem?
a)Amigos japoneses.
b)Amigos brasileiros.
c)Outros amigos.
d)Vários.

4-3.Possui amigos que auxiliam nos estudos e ensinam japonês?
a)SIM. b)NÃO.

Para pessoas que responderam (SIM):
Quem são os amigos?
a)Amigos japoneses.
b)Amigos brasileiros.
c)Outros amigos.
d)Vários.

4-5.Geralmente,onde e de que brinca com os amigos?

_____

4-6.Qual é o horário que mais gosta na escola?
a)Do estudo.
b)Da refeição.
c)Do descanso(Intervalo).
d)Da Educação Física.
e)Outros.(Qual?_____)

4-7.Qual é o horário escolar que mais não gosta?
a)Do estudo.
b)Da refeição.
c)Do descanso(Intervalo).
d)Da Educação Física.
e)Outros.(Qual?_____)

4-8.Participa das aulas de língua japonesa oferecido pela Prefeitura e Associação Internacional de Ohta(Grupo " Ayumi no Kai")?
a)SIM. b)NÃO.

Em caso de (SIM),o que está estudando? _____

Grato pela cooperação,

Instituto de Pesquisa Lingüística Nacional

付　録　１－２
両親へのアンケート

こどもさんの教育問題に関して

１．こどもさんの将来の生活場所について、どこにいて欲しいですか？
　a.母国（ブラジル）　b. 日本　c.どちらでもよい　d.他の国　e.わからない

２．日本語／母語（ポルトガル語）教育に関してどう考えていますか？
　a.バイリンガル（日本語もポルトガル語も同じように使えるような人）にならせたい
　b.日本語をきちんと習得できれば、母語（ポルトガル語）は忘れてもしょうがない
　c.日本語習得よりも、母語（ポルトガル語）能力を保持し、レベルアップさせたい
　d.わからない

　その理由は何ですか？

　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

３．ポルトガル語の維持（保持）教室や塾についてどう思いますか？
　3-1.ポルトガル語の教室や塾に興味がありますか？
　　は　い　／　いいえ　／　わからない
　3-2.ポルトガル語の維持教室が太田市にあったらいいと思いますか？
　　は　い　／　いいえ　／　わからない
　3-3.太田市あるいは大泉にあるポルトガル語の塾に通わせたことがありますか？
　　は　い／　　いいえ

４．次の文化（風習、お祭り等）に関する考え方の内、どの考え方に最も賛成しますか？
　a.日本の文化も大切だが、ブラジルの風習や習慣も同じように大切にしてゆきたい。
　b.日本に住んでいるのだから、ブラジルの風習や習慣は忘れても仕方がない。
　c.日本の文化よりもブラジルの風習や習慣の方が大切だと思う。
　d.わからない

５．こどもさんの教育（学歴）に関してどう考えていますか？
　ａ．中学卒業で十分
　ｂ．高校卒業で十分
　ｃ．大学までいかせたい
　ｄ．こどもの意志次第では、大学院までいかせたい
　ｅ．わからない

６．こどもさんに将来どんな職業に就いて欲しいですか？

現在の生活に関して

１．日本に来てから困っておられることは何ですか？
　（具体的にお書き下さい）

　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

２．あゆみの会を知っていますか？　　は　い　／　いいえ
　あゆみの会に参加していますか？　　は　い　／　いいえ
　あゆみの会で何を勉強をしていますか？　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

　＊このアンケートは主にお父さん・お母さんのどちらが答えて下さいましたか？
　　父　／　母

ご協力有り難うございました。

Enquete para os Pais

Esta enquete faz parte das atividades programadas no Projeto de Difusão da Língua Japonesa nesta região e foi elaborada pelo Instituto de Pesquisa Lingüística Nacional,sendo que possui a finalidade de investigar o grau de adaptação dos nikkeis,bem como as necessidades de estudo da língua japonesa.

Os resultados desta pesquisa não serão utilizados de maneira alguma para outras finalidades além dos citados acima.

Contamos com a colaboração de todos.

Instituto de Pesquisa Lingüística Nacional

*** *** ***

Favor responder as questoes abaixo,relacionados à educação/cultura dos seus filhos.

Em relação à postura dos Pais nos seguintes ítens:

1.No futuro do filho:

a)Gostaríamos que voltasse ao Brasil.

b)Gostaríamos que vivesse no Japão.

c)Tanto faz.

d)Não sabemos.

2.Sobre o estudo da língua japonesa/língua nativa(português):

a)Gostaríamos que se torne bilíngüe(Que domine tanto o japonês como o português).

b)Achamos que será inevitável que a criança esqueça o português,uma vez que conseguir aprender o japonês.

c)Achamos o estudo do português mais importante do que o estudo do japonês.

d)Não sabemos.

Motivo: _____

3.Sobre os cursinhos e escolinhas de português:

3-1.Possuem interesse nesses cursinhos?

a)SIM

b)NÃO

c)Não sabemos

3-2.Gostariam que tivesse escolinhas e cursinhos de português em Ohta?

a)SIM

b)NÃO

c)Não sabemos

3-3.Já fizeram a criança freqüentar algum cursinho ou escolinha de português em Ohta ou Oizumi?

a)SIM

b)NÃO

4.Sobre a preservação da Cultura nativa(Do Brasil:costumes,hábitos,folclores,etc.):
a)A cultura japonesa é importante porém,a cultura brasileira também é importante e gostaríamos de mantê-la.
b)Achamos inevitável a criança esquecer a cultura brasileira,uma vez que estamos vivendo no Japão.
c)Achamos a cultura brasileira mais importante do que a cultura japonesa.
d)Não sabemos.

5.Sobre a educação(Instrução) da criança:
a)Será suficiente concluir o ginásio(Chuugakkou).
b)Será suficiente concluir o 2o. Grau(Koutougakkou).
c)Gostaríamos que curse até a universidade.
d)Dependendo da vontade da criança,gostaríamos que realize até a pós-graduação.
e)Nao sabemos.

6.Futuramente,que tipo de trabalho(Profissão) almejam para a criança?

_____

Em relação ao dia-a dia atual:
1.Estão enfrentando alguma dificuldade após chegar neste país?

_____

2.Estão participando das aulas de japonês oferecidos pela Prefeitura e Associação Internacional de Ohta(Grupo " Ayumi no Kai")?
a)SIM
b)NÃO
Em caso de (SIM):
O que estão estudando?

_____

3.Quem respondeu esta enquete?
a)Pai
b)Mãe
c)Os dois juntos

4.Quando responderam:
a)O pai discordou sobre alguns ítens.
b)A mãe discordou sobre alguns ítens.
c)Concordamos sobre todos os ítens.

Grato pela cooperação,

Instituto de Pesquisa Lingüística Nacional

付　録　2

担当教員（講師）の方へのアンケート
太田版

1．異文化の人々と共存してゆくために最も大切なことや心構えは何だと思いますか？

2．異文化の人々と共存してゆくことは日本（人）にとってプラスorマイナスと捉えますか？

プラス　／　マイナス

なぜ、そう思いますか？

3．子弟の母語教育は必要だと思いますか？

必要　／　不必要　／　わからない

なぜ、そう思いますか？

4．英語圏におけるＥ．Ｓ．Ｌ．（English as a Second Langugae）クラスのようなもの（例えば、Ｊ．Ｓ．Ｌ．：Japanese as a Second Lnaguage クラス）が将来日本にも必要だと思いますか？

必要　／　不必要　／　わからない

そのためには、何が必要だと思いますか？
例）教師の再訓練、新しい教科書、ワーク・シート作り等

5．外国人の子弟（および日本人子弟）のために、専門の学校カウンセラーあるいは異文化適応のためのインターカルチュラルカウンセラーが必要だと思いますか？

必要　／　不必要　／　わからない

6．国際理解教育あるいは多文化教育（異文化、異民族の人々との共存へ向けての民族教育や社会科教育など）のための（単独あるいは混合）クラスは必要だと思いますか？

必要　／　不必要　／　わからない

なぜ、そう思いますか？

7．日頃の授業において意識して応用しているあるいは活用している教授法があればお書き下さい。
例）ＣＬＬ、ＴＰＲ、サジェストペディア、コミュニカティブ・アプローチ等

8．その他、外国人子弟への言語（日本語＆母語）教育に関して、何か提言があればお書き下さい（できる限り書いて頂ければ幸いです）。

ご協力有り難うございました。

付　録　3

日本語教育が必要な外国人児童・生徒の日本語能力

調　査　票

調査票Ⅱ　〔学校用２〕

(1) 御記入の前に，記入上の注意をお読みください。
(2) ＊印の項目については，次ページのコード表から該当する番号を選んで記入してください。

＊1　都道府県コード（ 10 ）	市区町村名　太田市
学校名	
日本語教育が必要な外国人児童・生徒数　（　　人）	

（日本語教育が必要な外国人児童・生徒の日本語能力）

番号（通し番号）	性別	満年齢	＊2 現在の在籍学年	＊3 通算の在日年数	＊4 日本における在留期間	＊5 日本語以外に日常使用している言語		日常会話における日本語の理解状況	教科学習における日本語の理解状況			
									（聞く力）	（話す力）	（読む力）	（書く力）
						言語コード6	※その他の場合は言語名を記入6	全くできない 少しできる おおむねできる	◆先生や友達の話を聞いて理解できる	◆グループや学級の中で発表や話し合いができる	◆記述内容を読んで理解できる	◆考えや意見を文章として表現できる
	男1 女2	（歳）						1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	1 2							1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3

太田市資料

出典：文化庁主催『地域日本語教育セミナー』（1995.8.2）

配布資料 pp.8-17.

および

太田市役所の配布資料

表1　太田市外国人登録者数

国籍＼年度	1988年度			1989年度			1990年度			1991年度			1992年度			1993年度			1994年度		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
ブラジル	70	28	98	262	128	390	732	400	1,132	1,110	615	1,725	1,419	686	2,105	1,216	666	1,882	1,328	842	2,170
フィリピン	7	253	260	3	319	322	6	361	367	24	549	573	15	491	506	14	557	571	35	694	729
中国	17	25	42	20	27	47	93	30	123	365	48	413	541	57	598	355	73	428	349	84	433
韓国、朝鮮	181	168	349	188	182	370	180	188	368	177	202	379	171	214	385	182	225	407	179	215	394
ペルー			0	29	5	34	42	26	68	166	79	245	118	72	190	110	76	186	133	100	233
イラン	1		1	1		1	8		8	37		37	92	1	93	87		87	83		83
インドネシア			0	8		8	17		17	36	2	38	75	2	77	26	12	38	50	2	52
フランス	1		1	3	5	8	19	15	34	37	28	65	32	26	58	26	19	45	24	19	43
ボリビア	1		1			0	20	3	23	31	5	36	13	6	19	8	7	15	21	9	30
パキスタン	2	2	4	2	2	4	4	2	6	26	2	28	27	1	28	23	2	25	25	2	27
アメリカ合衆国	16	6	22	11	6	17	14	6	20	12	13	25	14	14	28	13	13	26	13	14	27
タイ	5	2	7	51	1	52	44	1	45	13	4	17	12	9	21	5	8	13	11	12	23
アルゼンチン	3	4	7	4	7	11	6	7	13	13	6	19	10	5	15	10	7	17	10	7	17
イギリス	6	4	10	9	4	13	10	3	13	10	4	14	11	3	14	11	2	13	12	1	13
スリランカ			0			0			0			0	2	1	3	4	2	6	7	2	9
インド			0			0			0			0			0	3	1	4	8		8
パラグアイ	4		4	2		2	4		4	8	1	9	8	2	10	6	2	8	6	1	7
バングラデシュ			0		1	1			0			0	2		2	3		3	6		6
ニュージーランド			0	2	1	3	1		1		1	1			0			0	3	3	6
カナダ	2	2	4	4	2	6	7	1	8	7	2	9	5	4	9	6	2	8	4	1	5
ミャンマー			0			0			0		1	1	4		4	4		4	4		4
マレーシア			0	4		4	3		3			0	2	1	3	3	1	4	3	1	4
スペイン			0			0			0	1	1	2		2	2		2	2		4	4
ロシア連邦			0			0			0			0		5	5		11	11		3	3
メキシコ		1	1		1	1	2	1	3	2	3	5	1	5	6	1	3	4	2	1	3
ナイジェリア			0			0			0			0			0	1		1	3		3
コロンビア			0			0			0			0		1	1		1	1	1	2	3
オーストラリア		3	3	2	2	4	1	2	3	3	3	7	3	3	6	2	2	4	1	2	3
アイルランド			0			0			0	1	1	2	1	2	3	1	2	3	1	2	3
スリナム			0			0			0	2		2	2		2	2		2	2		2
オランダ			0			0	1		1	1		1	1		1	1		1	2		2
ヨルダン			0			0			0			0			0			0	1		1
ギーリシャス			0			0			0			0			0	1		1	1		1
ポルトガル			0			0	1		1	2		2	2		2	2		2	1		1
ベルギー			0			0		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1
トリニダトトバコ		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1
チリ			0			0			0			0			0			0	1		1
スウェーデン			0			0			0			0			0	1		1	1		1
サプライス			0			0			0			0			0			0	1		1
カンボジア			0			0			0			0			0			0		1	1
ガーナ			0			0	1		1	2		2	2		2	1		1	1		1
イタリア			0			0		1	1		1	1		1	1	1	1	2	1		1
イスラエル			0			0			0			0	1		1	1		1	1		1
ブルガリア			0			0	1		1	1		1			0			0			0
バーレーン			0			0			0		1	1			0			0			0
ドイツ			0			0			0	1		1			0			0			0
チュニジア			0			0			0	2		2	1		1			0			0
ウクライナ			0			0			0			0		2	2			0			0
合計	316	499	815	605	604	1,299	1,217	1,049	2,266	2,090	1,575	3,665	2,567	1,618	4,205	2,130	1,699	3,829	2,335	2,026	4,361

図1　太田市外国人登録者数上位5カ国の推移

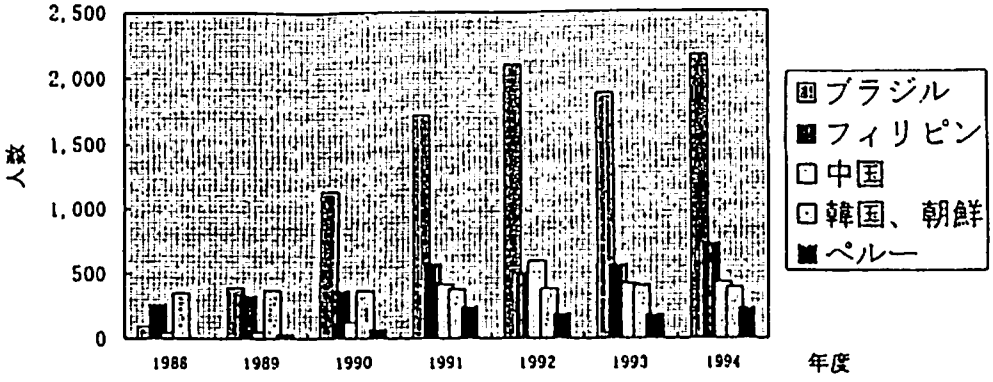
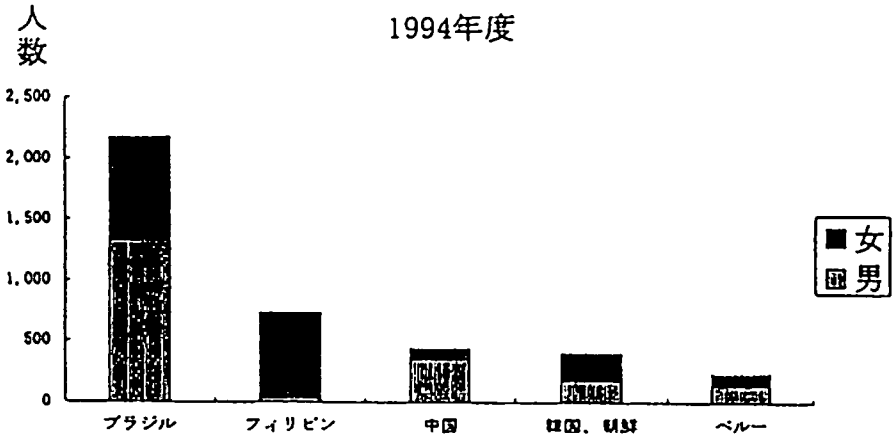


表2　太田市外国人登録者数（上位5カ国）

	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
ブラジル	98	390	1,132	1,725	2,105	1,882	2,170
フィリピン	260	322	367	573	506	571	729
中国	42	47	123	413	598	428	433
韓国、朝鮮	349	370	368	379	385	407	394
ペルー	0	34	68	245	190	186	233

図2　太田市外国人登録者数上位5カ国の男女割合



国籍	1993 年度 男	女	計	1994 年度 男	女	計
ブラジル	1,216	666	1,882	1,328	842	2,170
フィリピン	14	557	571	35	694	729
中国	355	73	428	349	84	433
韓国、朝鮮	182	225	407	179	215	394
ペルー	110	76	186	133	100	233

表３　太田市における外国人日本語講座受講者数等の推移

	平成５年度	平成６年度		平成７年度	
		前期	後期	前期	後期
初級受講者	7ｶ国　４５人	8ｶ国　２１人	5ｶ国　３６人	9ｶ国　４８人	
中級受講者		13ｶ国３８人	13ｶ国６５人	9ｶ国　４３人	
学生受講者				2ｶ国　２７人	
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ講師	６５人	４３人	３７人	６３人	

表４　市内小中学校における年度別外国人子女就学状況等の推移

	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995
外国人子女 就学数（人）	1		3	13	39	90	126	112	124
日本語指導 教室設置数（校）					2	4	6	9	12
日本語指導 助手配置数（人）					2	5	6	7	9

表５　外国人相談窓口の受付状況

	平成４年度	平成５年度	平成６年度
相談件数	３０９件	５９５件	６６２件
主な 相談内容	①医療健康 ②住宅関係 ③就労関係	①住宅関係 ②税金関係 ③在留資格 外国人登録	①住宅関係 ②在留資格 ③税金関係

国籍別－外国人子女就学状況　（平成7年9月1日現在）＊変更箇所

	人数計	ブラジル	ペルー	中国	ベトナム	フィリピン	アメリカ	アルゼンチン	朝鮮	パラグアイ	ボリビア	前月比増減
太田小	＊3	1	1	1	＊0							－1
九合小	2	2										
沢野小	19	10	5	4								
韮川小	＊9	＊9										＋2
鳥之郷小												
太田東小	12	10	1			1						
南　小	2	2										
休泊小	＊5	＊5										＋1
強戸小	＊1			＊1								＋1
宝泉小	＊7	＊7										＋1
宝泉南小	2	1		1								
毛里田小												
中央小	＊15	15										＋2
宝泉東小	＊6	1	＊3					2				＋1
韮川西小												
旭　小	＊21	10	5	2	4							＋3
駒形小	＊0					＊0						－1
城西小	4	4										
小計	108	77	15	9	4	1		2				＋9
西　中	＊0				＊0							－1
北　中	＊5	＊3		1		1						
東　中	4	3				1						
南　中	8	5		3								
休泊中	＊3	＊3										＋2
強戸中	2	1					1					
宝泉中	2	2										
毛里田中												
城西中	3	2		1								
城東中	＊4	＊4										＋1
旭　中	＊10	＊4	2	1	3							＋2
小計	＊41	25	2	7	3	2	1					＋4
太田發達	1	1										
合計	150	104	17	16	7	3	1	2				＋13

外国人登録国籍別人員調査月報

区分 国籍	合計	性別 男	女	構成比	対前月 増減	備考	
国籍数　48ケ国	4,480	2,451	2,029	100.0%	123		
アルゼンティン	17	10	7	0.4%	0	南米	西語
オーストラリア	2	0	2	0.0%	0	ｵｾｱﾆｱ	英語
ベルギー	1	0	1	0.0%	0	欧州	仏語
ボリヴィア	20	15	5	0.4%	-2	南米	西語
ブラジル	2,227	1,345	882	49.7%	39	南米	伯語
ブルガリア	3	0	3	0.1%	0	東欧	露語
ミャンマー連邦	5	4	1	0.1%	0	ASEAN	
バングラデシュ	27	26	1	0.6%	7	印亜	英語
カンボディア	1	0	1	0.0%	0	ASEAN	仏語
カナダ	6	3	3	0.1%	1	北米	仏語
スリ・ランカ	14	11	3	0.3%	-1	印亜	英語
チリ	2	2	0	0.0%	0	南米	西語
中国	515	422	93	11.5%	51	東亜	中語
コロンビア	3	1	2	0.1%	0	南米	西語
コスタ・リカ	3	0	3	0.1%	0	中米	西語
サイプラス(ｷﾌﾟﾛｽ)	1	1	0	0.0%	0	地中海	
フランス	43	23	20	1.0%	-6	欧州	仏語
ガーナ	1	1	0	0.0%	0	西阿	仏語
インド	9	9	0	0.2%	0	印亜	英語
インドネシア	57	39	18	1.3%	-9	ASEAN	英語
イラン	79	79	0	1.8%	1	中東	ペ語
アイルランド	6	3	3	0.1%	2	欧州	英語
イスラエル	1	1	0	0.0%	0	中東	ヘ語
イタリア	1	1	0	0.0%	0	欧州	伊語
ジョルダン(ｼｮﾙﾀﾞﾝ)	1	1	0	0.0%	0	中東	
朝鮮・韓国	373	164	209	8.3%	-3	東亜	ハ語
マレイシア	3	3	0	0.1%	0	ASEAN	
メキシコ	6	4	2	0.1%	1	中米	西語
モーリシャス	1	1	0	0.0%	0	東阿	仏語
ネパール	2	1	1	0.0%	1	中亜	
オランダ	1	1	0	0.0%	-1	欧州	蘭語
ﾆｭｰ･ｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ	2	1	1	0.0%	0	ｵｾｱﾆｱ	英語
ナイジェリア	2	2	0	0.0%	-1	西阿	仏語
パキスタン	26	23	3	0.6%	0	印亜	英語
パラグァイ	10	9	1	0.2%	0	南米	西語
ペルー	288	164	124	6.4%	15	南米	西語
フィリピン	599	29	570	13.4%	25	ASEAN	ﾀｶﾞﾛｸﾞ
ポルトガル	2	2	0	0.0%	0	欧州	伯語
ルーマニア	7	0	7	0.2%	0	東欧	露語
ロシア連邦	7	0	7	0.2%	0	東欧	露語
スペイン	2	0	2	0.0%	0	欧州	西語
スウェーデン	1	1	0	0.0%	0	北欧	ｽｳｪｰﾃﾞﾝ
スリナム	2	2	0	0.0%	0	南米	西語
タイ	24	10	14	0.5%	1	ASEAN	ﾀｲ語
トリニダッド・トバゴ	1	0	1	0.0%	0	南米	西語
英国	11	10	1	0.2%	-1	欧州	英語
米国	31	14	17	0.7%	-1	北米	英語
ヴェトナム	30	12	18	0.7%	4	ASEAN	仏語
無国籍	4	1	3	0.1%	0		

本統計は、太田市で平成 7年 10月31 日現在保管する外国人登録原票に基づき作成したものである